

駐日教皇使節ピオンディ大司教の長崎教区訪問の報告

片岡 瑠美子

The Report on the Visit to the Nagasaki Diocese by the First Apostolic Delegate to Japan, 1921

Rumiko KATAOKA

Abstract

This paper is translated from Italian into Japanese and explains the report of the Visit to the Nagasaki Diocese, which was originally reported on by the first Apostolic Delegate to Japan, Archbishop Biondi. Actually, this is the first official report of the Nagasaki Diocese. The report definitely shows the history of the Roman Catholic Church in Nagasaki, until 1921 when the first Visit was held. It also suggests to the Nagasaki Diocese that some pertinent problems existed and that these needed to be changed. After the report, some suggestions materialized. Those were to divide the Nagasaki Diocese at that time by area, the necessity to found some Japanese female religious congregations to promote education and to integrate the separated AIKUKAI, which was organized by single lay women working in Parishes. The result of the suggestions made tells us clearly the significance of the first Visit and how important the report by the Apostolic Delegate was.

序 論

表題としたこの文書は、初代日本駐在教皇使節ピエトロ・ピオンディPietro Biondi 大司教が長崎教区を視察訪問した結果を、当時の教皇庁布教聖省長官ヴィレム・ヴァン・ロッスムWillem Marinus van Rossum枢機卿宛に認めた報告書である。

『カトリック新教会法典』の第360条では、「ローマ教皇は、普遍教会に対する業務を、通常ローマ教皇庁を介して行なう」と規定している。

教皇庁Curia Romanaの組織は、官庁と教皇内事管理室に分かれ、官庁は、國務省、省、裁判所、評議会、事務局に分かれている⁽¹⁾。

省Congregationes は9省あり、それぞれに枢機卿が長官Praefectus⁽²⁾として任命されている。布教聖省（現福音宣教省pro Gentium Evangelizatione）は、それら省の一つである。

この省は、1622年、グレゴリオ15世教皇によって正式に設置され、布教聖省Sacra Congregatio de Propaganda Fideと呼ばれていたが、1988年、ヨハネ・パウロ2世により福音宣教省と改称された⁽³⁾。

福音宣教省は全世界のカトリック教会の宣教活動を指導・調整することを任務とし、現在、その権限はアフリカ、アジア、オセアニアのほぼ全域と南アメリカ及びヨーロッパの一部地域に及ぶ。宣教に関する神学・霊性・司牧の研究と調査を行い、時代と場所に則した福音宣教の指針と方向を提示し、宣教師の召命を促進し、司祭・カテキスタの養成に配慮し、司教の任命に関わっている。1627年にウルバノ8世教皇が司祭養成のコレジオとして創立した、現在の教皇庁立ウルバノ大学は、福音宣教省長官である枢機卿が理事を務める同省直轄の大学である。

17世紀に創立されたパリ外国宣教会、その後19世紀後半から次々と設立された宣教活動を目的とする修道会は福音宣教省の管轄下にある。

この度翻訳を試みた、"Relazione della Diocesi di Nagasaki" inviata dal Delegato Apostolico del Giappone は、福音宣教省の公文書を保管する文書館L'Archivio Storico della Congregazione per l'Evangelizzazione dei popoli⁽⁴⁾に所蔵されているイタリア語手書き文書である。文書には、Protocollo 1386の番号が付けられており、ff.44-56に該当する。内容は、初代駐日教皇使節ペトロ・フマゾニ・ピオンディ大司教Pietro Fumasoni Biondiが、長崎教区を訪問し、1921年2月21日付で、東京からローマの福音宣教省（当時布教聖省）長官ヴァン・ロッスムvan Rossum⁽⁵⁾に宛てた報告書である。

I. 教皇庁と日本政府の外交

ローマ教皇庁は、1858年6月27日の清仏天津条約調印によって清国におけるカトリック教会の宣教活動が解禁され、インドシナ半島や朝鮮半島においてもカトリック教会の宣教が解禁されると、当然、日本に注目していた。日本の開国によって多くの修道会が宣教活動を開始し、宣教開拓の全盛期を迎えると、多くの教会が設立され、信徒数だけでなく事業所も増大した。カトリック教会の教勢がこのように進展してくると、日本政府もローマ教皇庁の存在とその役割を理解し、諸外国同様、外交関係の必要性の認識を深めていた。教皇庁側からは、度々、日本政府に使節の交換を望んだが、日本政府が辞退したため、その関係は慶弔電の交換にとどまっていた。その理由は国内に宗教法が成立していないこともあったが、仏教各派の反対が強く国民感情からしても不可能なことであったと、高木一雄氏は『日本・ヴァチカン外交史』の中で述べている。

1. ローマ教皇特派使節派遣

『聖座文書Acta Sanctae Sedis』⁽⁶⁾と呼ばれる教皇庁の文書のなかに、1885年5月12日付"Lettera all' Imperatore del Giappone Mutsuhito"⁽⁷⁾を見ることができる。

これは、『公文録』に、

我邦駐在羅馬教師オスーフ氏羅馬法皇レオン第十三ノ書翰捧呈ノ為内謁見

在日本羅馬教師アルシノエ僧正ベ・エム・オスーフ氏羅馬法皇ノ書翰捧呈之為メ謁見願出

ニ付別紙之通外務卿ヨリ照会有之遂 奏聞候処来ル十二日午前十一時内謁見被 仰付候旨
被仰出候条 此段申進候也

十八年九月九日

宮内卿伯爵 伊藤博文

太政大臣公爵 三条実美殿

と記されているように、レオ13世教皇が1885（明治18）年、日本の北緯代牧区⁽⁸⁾ オズーフ
Osouf司教⁽⁹⁾ に託して明治天皇へ捧呈した親書である。教皇はこの書簡のなかで、日本の政治
的、経済的な目覚ましい発展を祝すとともに、日本のカトリック教会と信徒の自由と保護を願って
おり、『公文録』に記すとおり、9月12日午前11時から行なわれた謁見でオズーフ司教が挨拶とと
もに明治天皇に捧呈した。

この親書が以後展開されていく日本と教皇庁との外交の始まりであった。その後、ローマ教皇
庁と日本国政府との間には、間接的に外交関係がもたれ、使節派遣はなかったが慶弔の電報の取
り交わしが慣例となった⁽¹⁰⁾。

1905（明治38）年11月10日、ローマ教皇特派使節オConnell William Henry O'Connell大司教⁽¹¹⁾
（アメリカ合衆国ボストン大司教）は宮内省から宿舎の帝国ホテルへ差し回しの儀装馬車で儀仗
兵に護られ宮中へ向かった。そして随員として2名の司祭をともない参内、鳳凰の間において明
治天皇に謁見した。天皇への挨拶に続いて、日露戦争による平和回復と、戦争中における韓国や
満州地方における教会保護に対する感謝と、あわせて日本におけるカトリック教会の保護を願
うピオ10世教皇直筆の親書を天皇へ奉呈した。

この答礼として、日本政府はオーストリア国駐在特命大使内田康哉を特派使節として教皇庁に
派遣し、1907（明治40）年7月22日、ピオ10世教皇に天皇の親書を奉呈している。

大正期に入ると、1914（大正3）年、ピオ10世教皇の薨去に際し、天皇・皇太子、また政府か
ら教皇庁国務聖省長官あて弔電が送られ、1916（大正5）年、大正天皇即位祝賀のため、教皇庁
使節ペトレリ Joseph Petrelli大司教がベネディクト15世教皇の親書を捧呈するなど慶弔の親書が
交わされていた。

2. 初代駐日教皇使節ビオンディ大司教

1919（大正8）年には教皇庁の方から日本への使節派遣を要望、10月14日、ローマ教皇庁と日
本国政府間に協約書が交換され、11月26日初代駐日教皇使節にピエトロ・フマゾニ・ビオンディ
大司教が任命されたのである。日本におけるカトリック教会の布教も進み、修道会による事業な
ど社会的にも進展してくると、ローマ教皇庁と日本政府との間の外交問題も生じ、これを取り扱
う機関の設置が求められた。その結果、これから述べるビオンディ大司教が初代教皇使節として
派遣され、教皇使節館が開設された。

ペトロ・フマゾニ・ビオンディ大司教Pietro Fumasoni Biondiは、1872年9月4日イタリア・ローマ生れ、1897年4月17日司祭叙階、布教聖省の教皇庁立コレジオ・ウルバノ（ウルバノ大神学院・現在の教皇庁立ウルバノ大学）で修辭学の教授および布教聖省書記官となった。ベネディクト15世教皇によって、ディオクレアDiocleaの名義司教に選任され、1916年インド駐在ローマ教皇庁使節に任命された。その頃、インドの教会は、イギリスとの戦争で232人の司祭、80人の修道士、76人の修道女が、あるいは国籍によって抑留されたり、あるいは、軍隊に送られるというもっとも悲しい状況にあったが、セイロン教区、インド南部の教区、北部地方の視察訪問を行い、状況打開に努めたといわれる。

1919年（大正8）11月26日、ビオンディ大司教は日本に最初の教皇庁使節館を開設するため⁽¹²⁾に、教皇使節として東京に行くよう命令を受けた。ベネディクト15世教皇は、日本政府宛ての信任状Breveのなかで、「1891年にレオ13世教皇が司教区を設け、東京を大司教座と定めたことは、広く知られるところです。それ以来、多くの修道会が貴国日本に渡ってカトリックの布教に努め、今や教会は日を追って盛んになっております。私はこれをみて喜びに堪えません。そこで、布教聖省の枢機卿たちと話し合い、かつ熟慮の上、この度、日本帝国に教皇使節を駐在させることに決めました。これは、第一に日本帝国のカトリック教会にあらたな力を与えるためであり、つぎに、名誉あるその国民に広く私の愛を表明したいと願うからであります。その証としてこの信任状を付与する次第です」と述べている⁽¹³⁾。

そして、12月6日、東京都京橋区明石町35番地の元東京大司教館跡に教皇使節館が設置された。

教皇使節Delegato Apostolica⁽¹⁴⁾とは、聖座との外交関係を有してなくても、その国のカトリック教会が、司教団とカトリック信者を有している場合、聖座は恒常的使節として、教皇使節を派遣することがある。現在では普通、名義大司教がこれにあてられる。

1920年3月11日着任したとき、ビオンディ大司教は49歳であった。3月26日、パリ外国宣教会会員でのちに東京大司教となるシャンボン神父を秘書官に任命した。

着任後、使節としての任務遂行のため、早速に教区の視察訪問を実施した。5月、ビオンディ教皇使節は、東海・関西・四国方面を訪問、8月には東北・北海道、そして、10月に長崎教区を訪ねた。しかし、ビオンディ大司教は、着任早々にして日本の皇太子のローマ訪問⁽¹⁵⁾の準備をすることになった。短い間にも政府高官とも交わり、「彼はカトリック以外においても尊敬を得ることに成功した」と評されている。

1921年（大正10年）3月20日、ビオンディ教皇使節は日本国政府より勲二等瑞宝章を授けられ、3月21日開催された外務大臣主催の送別会の後、3月26日神戸港を出航した。1921年7月には勲一等瑞宝章を受けた⁽¹⁶⁾。

これらに対してのビオンディ大司教の談話を「日本外交文書」大正12年第3冊392に見ることができる。これは、駐伊臨時代理大使諸井六郎が外務大臣内田庚哉宛てに報告した機密公第2号となっている。

「(前略) 余ハ一九一九年法王庁宗務使僧トシテ日本ニ赴任シタリ日本ニ於テハ余ノ如キ宗務使僧ハ始メテノ事トテ当初官民ヨリ種々ノ誤解ヲ受ケタルモ漸次余ノ使命ハ宗務ニ関係シ外交上日本政府ト何等公式関係無キ事判明シ從テ余ノ立場モ気安クナリ日本政府又大ニ好遇セラレタリ特ニ故原首相内田外相及伊集院大使等ヨリ歓待セラレタルハ忘ルル能ハズ去ルニ臨ミ皇室ヨリ勲二等瑞宝章ヲ賜ハリ更ニ昨夏皇太子殿下法王庁御訪問ノ際勲一等ニ陞叙セラレタルハ感謝ノ外ナシ日本政府ト法王庁トノ外交関係開始ニ関シテハ余ノ研究ヲ怠ラサル処ナリ余ハ日本ト外交使節交換ヲ希望スルモノナリ而シテ交換ノ曉ハ相互ニ多大ノ利益ヲ享受スヘキ事ヲ確信ス (後略)」

この談話は、最初の使節としての苦勞とともに、ビオンディ教皇使節が政府高官に次第に受け入れられていったことを伺わせている。

加えて、「…若シ時世ニ鑑ミ法王庁ト外交関係ヲ開始シタシトスルナラハ日本政府ヨリ先ツ交渉ヲ進メラレタク然ラハ法王庁ハ今日ニモ喜ンテ之レニ応スル筈ナリ」と語っている。それは、ローマ教皇庁からは慣例上交渉を開始しないため、日本政府からの交渉を待っていたのである⁽¹⁷⁾。

日本駐在教皇使節に任命されてより4年を経てローマに戻ると、1922年布教聖省次官に任命され、長官であるファン・ロスマ枢機卿を補佐した。同年12月アメリカ合衆国駐在ローマ教皇使節に任命され、1926年にはシカゴで国際聖体大会を主催し、15管区の神学校を訪問、北アメリカの教会事情に通じた。1933(昭和8)年アメリカからローマに戻り、3月16日、ピオ11世によって枢機卿にあげられ、エルサレムの聖十字架教会を与えられた。そして、数ヶ月前に帰天した布教聖省長官ヴァン・ロスマ枢機卿の後を継ぎ、1958年に目の病のためにグレゴリオ・ピエトロ・アガジアニアンGregorio Pietro Agagianian枢機卿に長官代理として仕事を委ねながらも、1960年の死までその任務を全うした⁽¹⁸⁾。

ビオンディ大司教は、日本政府のローマ教皇庁に対する政治的誤解をといて友好関係確立のために努力し、また、全国各地を巡視して一般国民との理解接触を図ったと評価されている⁽¹⁹⁾。

コンパス司教も1921年度年次報告に、「我らはフマゾーニ・ビオンディ大司教の出発を残念に思う。しかし、教皇が彼に託された高い任務によって、彼のすぐれた長所が報われたのを見て、嬉しく思っている。彼が、日本におけるあまりにも短かった滞在の間にも、この国の福音化が出会う数多くの障害を理解し、かつ日本式のひどく丁寧な態度のもとに、カトリック教に対する政府の態度を認めることが出来たと、我らは確信している。どうか日本の皇太子のヨーロッパ旅行、バチカンをはじめ、至るところで殿下が受けられた熱い心からの歓迎がこの態度を改善し、障害を取り除くのに貢献するように」と記している⁽²⁰⁾。

3. 教皇使節の報告書の意義

そうした全国各地の教会を訪問した結果を、日本の教会の管轄である布教聖省（現福音宣教省）長官に報告しているが、ここに翻訳したのはその1つである長崎教区訪問の報告書である。

この教皇使節の職務には外交上の性格は一切なく、当該地方の司教とカトリック信者に対してのみ教皇の代理を務め、その地域の教会の状態を分析し、それを教皇に報告することを任務とする。教区の状態、すなわち教区管理、司祭養成、信者の生活等について報告するよう各司教に求めることができる。

従って、この報告書の内容は、1、長崎教区の一般的状況、つまり、九州全域の宣教の状況、特に、長崎において一人の司祭もいない禁教令の中、250年間信仰伝承を成し遂げてきた歴史と復活後の状況、かくれキリシタンなどの報告、2、教区の管理、セミナリオにおける教区司祭の養成、男子修道会、女子修道会の活動状況について、最後に今後の課題をまとめている。

今後の課題として提言していることは、①九州全域と沖縄を管轄としていた長崎教区を分割して再編し、福岡教区、鹿児島教区を設立すること、②長崎教区においては、特に女子教育のために修道会の来日を促すということであった。さらに、③当時行なわれていた福祉事業の拡大、④教育事業を行なう教区立女子修道会の創立と、「愛苦会」などのいわゆる「女部屋」の共同体を司教の職権をもって統合し、女子修道会とする準備を行なうことを提言している。

①については、1927年福岡教区と鹿児島教区が設立されて実現した。②については、L'Archivio stolico della Propaganda Fide に保存されている文書から、布教聖省がヨーロッパの女子修道会に会員の日本派遣を呼びかけていたことを知ることができる。幾つかの修道会は日本宣教を希望しながらも会員不足で派遣できないと答えている。

④の提言は、本学の母体である長崎純心聖母会の創立となって実現した。この報告を受けた当時の布教聖省長官は、ヴィレム・マリヌス・ヴァン・ロッスム Willem Marinus van Rossum 枢機卿であったが、1927年、長崎教区長として司教叙階された最初の日本人司教早坂久之助司教に、「布教聖省長官ヴァン・ロッスム枢機卿は、学校教育に当たる日本人女子修道会を長崎に創立するよう勧めた」。また、長崎教区司祭たちの新司教への要望のひとつに、女子教育のための修道会創立があったと修道会創立史は記している。

つまり、ビオンディ教皇使節が長崎教区を訪問したときの教区司祭たちの要望に、教育修道会の創立があり、大司教自身も報告書に述べているように、教区の現状を視察した結果、その必要性を認め、布教聖省長官ロッスム枢機卿に提言したので、そのことを早坂司教に勧めたのであろう。かくして、1928年に長崎教区長として着任した早坂司教は、修道会創立のための人選を行い、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）を卒業後、さらに東北帝国大学理学部で数学を学び、京都府立第一高等女学校数学科の教諭であった江角ヤスに創立への協力を求めた。そして、女子教育修道会として名声が高かったフランスの聖心会に江角ヤスらを送った。修練を終えて帰国した1934年、日本人による女子修道会「長崎純心聖母会」を長崎教区立として創立し、1935年4月、シスター江角ヤスを学校長として「純心女子学院（翌年長崎純心高等女学校と改名）

が創設された。

早坂司教は同時に、教区内の「愛苦会」等（当時「女部屋」と呼ばれていた）を準修道会と考え、1929年、教育に携わる会員を養成するよう呼びかけ、早速中等教育を受けるために数人が大浦で共同生活を始めた。しかし、早坂司教は1933年病いに倒れ、1937年長崎教区長を辞任した。2年後着座した山口愛次郎司教は、ようやく、1956年長崎県内26の共同体を統合して在俗修道会「聖婢姉妹会」とした。さらに次の長崎教区長里脇大司教により1975年、法的設立認可の申請がなされ、教区立「お告げのマリア修道会」が発足した。

このように、教皇使節の訪問とその視察報告は、布教地の教会を管轄する布教聖省（現福音宣教省）の政策・指導に大きな影響を与え、教皇庁と地方教会を結ぶ重要な役割を果たしていたのである。

今後、同じビオンディ教皇使節の東京、函館訪問の報告書の内容とあわせ、その後のカトリック教会の動きと照合していくことは、教皇使節の役割を理解することに欠くことのできない作業であると考えている。

L'Archivio storico della Propaganda Fide は聖年を機に、ジャンニコロの丘にあるウルバノ大学敷地内のコレジオ・ウルバノの建物の傍、「土井カンポ」（土井枢機卿に因んで名づけられた運動場）の地下に移転している。この文書閲覧に際し、様々な便宜を図ってくれた司書 Giovanni氏、同じくいつも親切に閲覧を助けてくれ、この拙論執筆にあたってとくに見落としていた参考文献を複写して送ってくれたウルバノ大学図書館司書Antonio Alesiani氏の名をここに記して、感謝を表わしたい。

Ⅱ. 翻訳文

Relaziome della Diocesi di Nagasaki

Pietro Arcivescovo di Dioclea Delegato Apostolico del Giappone

駐日教皇使節 デイオクレアのピエトロ大司教の長崎教区に関する報告

駐日教皇使節

99号文書

東京：1921年2月21日

尊敬申し上げます

布教聖省長官

グリエルモ・マリヌス・ヴァン・ロッスム枢機卿閣下殿

長崎教区の報告

ALL.2. a) 日本地図（別封筒）

b) 印刷物の切り抜き

尊敬申し上げる枢機卿様

(f.45)

私はほぼ一月にわたって長崎教区の司牧訪問を行ないました⁽²¹⁾。

長崎教区は信徒数が最も多く、日本の教区⁽²²⁾では最も重要なところであります。

九州の全島から成る布教区は、福岡、大分、宮崎、鹿児島、熊本、佐賀、長崎の7つの県と琉球の島々まですべてを管轄しております。この便と同時に別の封筒で、日本の新しい分県地図をお送りします。九州の人口は900万人、主な都市は、長崎が176,554人、佐世保（軍港）が113,967人、大学がある福岡の人口は94,275人、鹿児島93,980人、熊本71,903人、門司が71,724人などなどです。

カトリック信徒

一番新しい人口調査によると、九州圏内のカトリック信徒は56,314人ですが、カトリック信徒は社会的にはそれほど抜きん出た地位にはないので一般的には大きな影響をもっていません。東京では、(f.45v) カトリック信徒の数はとても少ないのですが、信徒がより高い評価を受けているので、影響力は大きいのです。

（原文では、第一頁の最後3行に宛名書きがなされている）

ここに県別信徒数を記します。

福岡	福岡（県の中心の町）	88	}	2,731
	今村（旧キリシタンの村）	1,731		
	久留米	442		
	小倉ー門司（最も商業的町）	470		
大分	大分（イエズス会時代の有名なかつての府内）	109		109
宮崎	宮崎	154		154
鹿児島	鹿児島ー川内	278		278
熊本	熊本	275	}	1,863
	琵琶崎	132		
	八代	165		
	人吉	107		
	天草（大きな島）	1,184		

佐賀	佐賀、小城、唐津	233	233
長崎	大浦、中町、浦上（長崎の小教区）	9,568	47,172
	大村	662	
	佐世保（大きな軍港）	2,421	
	出津、黒崎	3,489	
	伊王島（長崎港内の島）	4,098	
	平戸（大きな島）	8,159	
	黒島（平戸に近い島）	2,007	
	五島（3つの島からなる列島）	16,768	
琉球島	大島	3,774	3,774
			56,314

(f.46) ご覧のように、カトリック信徒が最も多いのは長崎県です。かれらは、1865年からパリ外国宣教会の宣教師の指導下に入った古いキリシタンの子孫のカトリック信徒たちなのです。パリ外国宣教会は、摂理によって、キリシタン時代のイエズス会、フランシスコ会、ドミニコ会、そしてアウグスチノ会の宣教師たちの地を再び開くことができたのです。

迫害が始まった頃の古いキリシタンたちは、ほとんどがこの大きな九州の島のこれらの地域におり、そこから付近の島々に散っていったのです。

したがって、長崎教区は、二つの異なる状況を示しています。実際に、それは、内輪の話ですが、宣教師たちが二手に分かれていたことに原因があります。一方はキリスト教的（長崎、長崎近郊と島々）地域、他方は異教的な地域です。

また、この異教的な地域においては、カトリックの大部分が、迫害が終わって後、他の場所に共同体をつくるために出て行った長崎の古いキリシタンから成っています⁽²³⁾。

まだ宣教師たちの指導に入らない2万から3万の古いキリシタンの子孫がいるという報告を受けています。(f.46v) その理由は、宣教師は、初期において、長崎のヨーロッパ人のための居留地に強制的に閉じ込められ、秘跡を授けるためには夜に出て行くしかなく、どこにでも出かけることは出来なかったことによるのです。

そのほか、これらの古いキリシタンたちはいつも新たな迫害を受けていました。結果的に他のキリシタンたちのように神の恵みに答えてこなかったために、信仰が弱くなり、次第に異教的になり、そのために、復帰したカトリック信徒から軽蔑を受けたのです。

それゆえ、私は、五島訪問において特に、すべての司祭と信徒に、これらカトリック教会への復帰が遅れている旧キリシタンを復帰させるために全力を尽くすよう、注意を喚起しました。私が聞こえない耳に向かってしゃべったのではないことを願っています⁽²⁴⁾。

徳川家光の時代、1636年から、キリシタンたちは、一人の司祭もなく、2世紀以上も続いた信じられない迫害の間、いろんな形で信仰を保つことが出来たのは奇跡です。

絵踏、つまり聖画を踏む義務は、年に1、2度課せられた儀式でしたが、それを逃れるために、少しずつ島に逃れ、森の奥深くに潜んで生活してきました。役人から没収を免れた幾つかの本、特に、口承された教理を通して、カトリックの真理の知識は伝承されてきました。

同じく、良心的妥協についても理解すべきです。例えば、(f.47) 毎年、宗教の調査 (Shumon Aratame 宗門改め) のとき、仏教徒であると認めたり、葬儀を僧侶にしてもらいながら、後で密かにキリシタンの儀式でやり直していたことなどがあります。村の指導者たちは、彼らだけが密かに教義を継承し、洗礼を受けてきました。現在、特にこれら洗礼を受ける人々 (水方) たちは、彼らのその権利が心配なために、旧キリシタンが宣教師のもとに行くのをしばしば妨害しています。

ある村では、女性がキリシタンになることを公にすることを夫に妨げられています。女性のおしゃべりを怖れて、今日まで、夫たちは夫人たちに洗礼を受けさせないだけでなく、宗教的事は何も教えられていないのです。

これらの状況の結果、私たちのカトリック信徒たちは、今日まで、町ではきわめて少なく、しかし、山に散って、森の木々を切り倒して島に変えていった山間部にいるのです。彼らの状態は、正直で節約に励みますので、社会的状況も日々、改善されてきています。五島では、今まで漁業のほか、例えば、森の木を切る仕事に奉公人として仕えていました。過去においてそれ以上に悪くなることを怖れてそれらに従事していました⁽²⁵⁾。

そして最終的には、既成事実が勝って裁判所に (その権利を) 認められました。しかし、ついに一人の日本人司祭⁽²⁶⁾ が五島においては、(47v) すべての日本人は同じく取り扱われるべきだと公の宣言を得たのです。そして、マリア会員やトラピスト会員のように日本にある修道会は、これらの旧キリシタンの中に、よい召命を得ようと探しています。長崎教区の日本人司祭はすべて旧キリシタンの出身であることはいうまでもありません。本当に、私は、旧信者も新信者も、すべてのカトリック信者はよい性格ですし、宗教的にはよく養成されていますといわざるを得ません。

この一般的状況の後には、教区について簡単に申し上げます。

司教と教区本部について

司教は1912年からジョバンニ・クラウディオ・コンパス Giovanni Claudio Combaz (1856.12.8—1926.8.18)、64歳⁽²⁷⁾ です。

司祭たち、特に宣教師たちの意見に任せていて、彼の通常の行動はとても限られているように私には思えます。なお、司教としての積極的な活動はほとんどなく、彼は今もセミナリオで熱心にラテン語を教えることに心を注いでいます。

(f.48) 総代理、普通、この職はパリ外国宣教会の神学校の教区では、《単なる名義上の人物》ですが、フランシスコ・ピエトロ・ルマリエ Francesco Pitro Lemarie¹、かれは、長崎から鉄道で一日の距離にある人吉の熱心な主任司祭であります。総代理、セミナリオの院長グラシー、浦上の主任司祭ヒューゼ Heuzet、ティリー Thiry、それにもう一人加えた人びとをもって、現在、教区

評議会ができています。彼らの中の一人が言うには普通、評議会は予算の承認の為に年に一度30分程度集まっているそうです。

教区司祭

教区司祭団は、パリ外国宣教会と宣教会会員ではないフランス人司祭ヒッポリト・ブルトー Ippolito Bulteau⁽²⁸⁾ との22名の司祭と30名の日本人司祭で構成されています。これらの日本人司祭たちは、大体においてよい印象を受けました。旧キリシタンは、非常な困難の中で成長しましたのであまり教養がありません。それは、彼らの親たちは、すべてを剥ぎ取られ、1873年まで流配されていたので、多くの場合、教育まで気を配る余裕はなかったからです。

しかし、若者は熱心で、教育され、十分教養があると思えます。ラテン語も上手に話します⁽²⁹⁾。彼らのうちの一人はコレジオ・ウルバノ⁽³⁰⁾ で学びました。彼ピエトロ・山川師⁽³¹⁾ は五島で司牧しています。神学博士ですが、それを誇ってはいません。司教は彼について満足しています。(f.48v)

セミナリオ（小神学校）⁽³²⁾

ではセミナリオについて述べましょう。

長崎教区の小神学校⁽³³⁾ は、日本で唯一セミナリオの名に値するものです。質素ではありますが、よくやってきましたし、本当によい教育をしています。建物は粗末ですが、すべてカテドラルと司教館の近くにあります。外部と遮断された教会の翼廊を聖堂として使っています。少なくとも、料理と住居の清掃は、生徒たちがしますし、また生徒たちが使う多少の洗濯物は自分たちでします（日本では食卓のナフキンやベッドのシーツはあまり使いません）。

神学校独自の勉強は、セミナリオ内で授業が行なわれます。セミナリオに住んでいる二人の日本人神父⁽³⁴⁾ が日本語と科学を教えています。司教はラテン語の授業を続けています。院長であるグラシーGracy神父は、病身の宣教師ドルエDrouet神父に授業とセミナリオの管理を助けられながら神学と教会法と一緒に教えています。院長はこれまで霊的指導司祭でしたが、教会法が出版された今、生徒たちの告解は普段は聴いていません。

セミナリオの運営費については、(f.49) 司教は、資本金25,000円+45,000フランス・フランで、当節、年利2,000円は生じていません。5棟の寄宿舎があり、一般的には生徒の親から、可能な範囲で何かをいただいていると私に報告しました。

長崎教区内の修道会⁽³⁵⁾

男子修道会はマリア会のほかにはいません。マリア会会員はヨーロッパ人11人、日本人19人（12人が修道士、7人が修練者）です。マリア会は長崎で眺望がすばらしい絶景の場所に学校（海星：海の星）⁽³⁶⁾ をもっています。生徒数は581人で、およそ70人がカトリックです⁽³⁷⁾。しかし、学校とともに重要な関係をもっている最も中心となる事業は「使徒学校」⁽³⁸⁾ です。

その学校は、人里離れた場所にあり、広い土地に囲まれていて静かな環境が保たれています。その場所は、浦上の小教区の大きな教会堂から徒歩で30分の距離にあります。ここにいう学校の目的は、日本人マリア会員を養成することです。教育のみに献身する目的をもつ宗教的身分への召命の難しさがあるので、司祭職の慰めがなければ、事業は極めて厳しいものです。この学校は1910年、マリア会員が多くての失望を乗り越えなければならなかった時代に始まりました。それは、養成が修了したのちに去っていくものが少なくないからです。(f.49 v) にもかかわらず、現在、9人の終生誓願宣立の日本人マリア会員がすでにいます。そして、日本人マリア会員が、今は種々の養成を受けさせられています、いつの日か日本人教授の地位を得ることができる偉大なる日が来るでしょう。現在、「使徒学校」la Scuola ApostolicaにはアポストリチApostoliciと呼ばれる50人の学生と7人の修練者がいます。

女子修道会について：⁽³⁹⁾

1) マリアの宣教者フランシスコ会⁽⁴⁰⁾は、熊本県の真の使徒コールCorre神父⁽⁴¹⁾の要請でハンセン病患者の世話のために1898年にここに来ました。彼女たちは、熊本の大きな町の郊外にある琵琶崎に50人くらいのハンセン病患者をお世話しています。ハンセン病院とともに、ひとつの施療院(救護院)、20人ほどの孤児を収容する孤児院、そして作業所をもっています。同じ県内の人吉では作業所と一緒に保育室をもっています。

福岡県内の小倉には、小さな病院、というより施療院をもっています。これらの事業のすべては、まだ初期の段階にあるようです。例えば、病院は一年に18人の病人しか入院していません。ハンセン病院は、ただ日曜日のミサのためにのみハンセン病患者が使う小さな教会堂です。(f.50) なぜなら、他の日々と日曜日も他の時間には、一般の人々が使うからです。修道女は24名でそのうち5名が日本人です。

2) シャルトルの聖パウロ修道女会⁽⁴²⁾

この修道女会は八代に寮付きの高等学校(生徒数258)⁽⁴³⁾をもっています。施療院が付いた小さな病院と、作業所付きの小さな孤児院ももっています。シスターたちは6名がヨーロッパ人、6名が日本人誓願宣立者、そして10名の日本人労務修道者がいます。

3) ショファイユの幼きイエズス修道女会⁽⁴⁴⁾

2つの修道院をもっています。一つは長崎の初等・高等学校と寮がある美しい修道院です。もう一つは施療院を持つ熊本のものと同じようなものです。修道女は23名、そのうち11名が日本人です。

4) 愛苦会 それぞれが独立した12の共同体から成るすべて日本人独身女性220人ほどです。彼女たちの共同体は浦上(最初のカトリック信者がいたところ)に始まりました⁽⁴⁵⁾。宣教の最初から小教区の手伝いをしてきました。浦上の乙女たちはそれぞれ他の共同体をつくるために指導に出かけ、修道会は広がっていきました。彼女たちは、畑を耕し、あるいは養蚕など、自分たちの手仕事の労作業で生活しています。今日、ほとんどすべての共同体が自分たち所有の畑を持つ

ています。同時に、(f.50v) 公教要理を教え、臨終の赤ん坊に洗礼を授け、ここかしこの小さな孤児たちを育てています。その場所の主任司祭への奉仕というただ一言なのです。これらはすべて長崎教区、とくに浦上、五島、平戸においてです。最近、ブルトンAlbert Breton神父⁽⁴⁶⁾の招きでカリフォルニアに一つの共同体ができました。メリノール会のジャコモ・Malsh神父が、太平洋沿岸、サン・フランシスコ、シアトル、そしてロス・アンジェルス日本人の世話のために、数人のアメリカ人シスターと共に働くために派遣した12人の日本人乙女たちです。私が見たり、聞いたりしたことから判断して、愛苦会の人びとは、謙遜、熱心さ、祈りについては最高の精神をもっています。弱点は教養と教育です。老人の多くは、読み書きさえ出来ません。今、何人かの宣教師の働きかけで、若い人々を学校に通わせ始めました。そして、教養と教育のレベルが向上する希望があります。

愛徳と教養のカトリック的事業

私が解決できたのは、本当に少しで貧弱なものです。より気がかりなのは、長崎にあるマリア会の高等学校です。マリア会員は熊本にももう一校開設しました。しかし、運営に携わる人が足りなくて閉鎖せざるを得ませんでした。そして、そこにプロテスタントの高等学校が花開いています⁽⁴⁷⁾。(f.51) 他の事業は全部長崎と熊本県にあります。福岡県内には小倉に唯一、フランシスコ会の施療院があるだけです。他の県には、敷地内に主任司祭の家がある教会以外には何もありません。福音宣教の事業は、とても難しく、仕事も少なく、それ以上に、特に南九州では仏教の一つの派が盛んです。その教えは、罪のゆるしと健康を得るためには、ただただ、仏陀への深い信頼を持ち、“仏陀よ、私をあわれんでください”とだけ機械的に繰り返すだけだと教えています。

函館のトラピスト会員は、九州の北部の中津に近いところに良い土地を持っています。彼らはそこに、アスピラント（修道志願者）のための学生寮をつくる計画をもっています。これまでは修練を始めるために函館に送っていました。

教区の財産については、少しでしたが、おおよそ使い果たしました。それは、戦争の間、為替相場が悪化したため、フランスのお金を引き出すことが出来なかったからです。お金が取り寄せられるようになりましたら改善されるでしょう。そして、司教は司祭たちが高齢となり、働けなくなったときのために司祭の家をつくる考えをもっています。

(f.51v) これが、教区の状況について述べる事ができるすべてだと思います。

何ができるか？

何よりもまず、私には教区の分割が役立つかと思われます。これは、二つの形で実現できるかと思われます。1) 長崎教区から佐賀県、福岡県、大分県を切り離し、福岡司教区を設立すること⁽⁴⁸⁾。今村のカトリック集落、小倉のフランシスコ会の小さな家、トラピスト会員の女子寮計画などをもって3000人のカトリック信者を数えることになるでしょう。このような分割は、福岡

の重要な都市で何かカトリックの一貫した教育機関を開設する資格と能力のある一つの修道会を有するよい機会だと私は考えます。2) 琉球を含め、鹿児島県、宮崎県と大分県を長崎教区から分けて、鹿児島司教区を設立すること⁽⁴⁹⁾。

司教区の本土で500人、島々で3,000人以上のカトリック信徒数になります。まだ福音宣教が始められていない琉球の中のいくつかの島で宣教を始めることが出来るようになれば好都合でしょう。添付した地図でこのことはよくご理解いただけると思います。

長崎の司教様は、2番目の計画に心惹かれておられます。(f.52) とくに、例えば、フランシスコ会員について問題があるとしても、私は異議ありません。100番の報告文書に記している事柄についてもう少し話しましょう。

(2) —ここ長崎教区では、他の教区のように特に女子のための学校と学寮の設立が必要です。しかし、問題は、修道会を探すことです。マリア会、マリアの小さな兄弟会、キリスト教学校修士会は、問いかけについて熟慮してくれましたが、要請には応えられないということです。そのほか、正直に申し上げますと、ここ日本では、そのような事業は、大きな都市、とくに東京、大阪、京都、仙台、岡山、福岡において強制する方が良いでしょう。

(3) —琵琶崎の宣教者フランシスコ会のハンセン病院や、熊本、小倉の小さな病院（むしろ施療院というべきでしょう）のように、すでにある愛徳の事業を拡大する方が、より有効でしょう。

(4) —枢機卿閣下、最後に思い浮かびました。多くの人が私に話したのですが、長崎のカテキスタと宣教者を養成する日本人の女子修道会を日本に創立するのが最も役に立ちます。その必要性を感じて、宣教の初めから愛苦会が創設されました。しかし、彼女たちは、(f.52v) 今まで長崎教区においては12の家とカリフォルニアに一つの共同体をつくりましたが、それらはみな独立しており、小教区に何かを組織することはありません。私の思うところですが、彼女たちは精神的によく訓育されていますが、しかし、必要な教育と教養が後回しになっています。ただ、この数年に、若い会員が少し勉学と教育を始めています。—私の考えは、将来のために、教区立のしっかりと規則に沿った修道会をこれらの要素を備えて創立するならば、布教聖省は満足するであろうと、長崎の司教様に知らせるべきだということです。それは、司教が、唯一司教の権限のもとで、これらのばらばらな共同体に対して高い職権をもつ教区司祭のひとりにこのことに責任を与える良い機会となるでしょう。その司祭は、すべての共同体がいっしょに一人の院長の選出を実現できる日まで、それぞれの共同体の入会許可、教育の奨励、経理の監督を取り締まる責任をもちます。その間にその司祭は、周辺地域の賛同を得て、女子修道会創立の規定に従って、特別な会憲を準備することができるようでしょう。(f.53) このことは司教様に詳細に示していただけると信じます。私は司教様とこれについて話しました。しかし、彼は行動的ではないので、ただそれについてかれをいらだたせるだけでなく、かれの考えと解決法を書面にするよう、かれに書く方がよろしいでしょう。—来るべき修道会は、そのような方法で統合され、改善されるために、他の共同体を開設し、また求められる他の宣教に役に立つでしょう。

枢機卿閣下、私が話しすぎましたらお許しください。そして、深い尊敬をもって、繰り返し枢

機卿様に接吻するためにひざまづくことをおゆるしく下さい。

枢機卿閣下の

卑しいしもべ

ディオクレアの司教ピエトロ

駐日教皇使節

注

- (1) 1983年に公布された現行の教会法典（『カトリック新教会法典』）第360条では、「教皇庁Curia Romanaは教皇Summus Pontifexの名と権威のもとに、教会の善益及び奉仕のためその任務を果す。ローマ教皇庁は国務省すなわち教皇省、教会外務評議会、諸省、裁判所及び他の機関から成り立っている」と教皇庁について定め、「ローマ教皇は、普遍教会に対する業務を、通常ローマ教皇庁を介して行なう」としている。（1992年発行日本語訳『カトリック新教会法典』195頁）

また、教皇庁という場合、ラテン語のSedis Apostolica 使徒座とSancta Sedis聖座の両方を意味している。教会法では、「本法典においては、使徒座若しくは聖座の名称は、ローマ教皇のみならず、事物の性質上、又は文脈上別段に考えられない限り、国務省、教会外務評議会及びローマ教皇庁の他の機関をも意味する」（第361条）

Sedis Apostolica 使徒座は、教皇のみを指す場合もあるが、多くの場合は「国務省、教会外務評議会およびローマ教皇庁の他の機関をも意味する。

Sancta Sedis 聖座という名称は、信仰に関する決議が問題になっている場合や「聖座の空位」などの場合は教皇を意味する。

わが国の外務省欧亜局が1965年4月に出した「ヴァチカン便覧」には、La Santa Sede を「カトリック教の最高機関であり、かつ国際社会の一主体」と理解して「法王聖座」と訳し、その「行政機関に過ぎない」La Curia Romanaを「法王庁」と訳している。また、ヴァチカンという名称も、種々の意味に使用されている、として、「もともと、ヴァチカンとは、サン・ピエトロ大聖堂を中心とする一帯の場所の名称であるが、1929年のラテラノ条約によって創設された国はヴァチカン市国と呼ばれている。この場合には、その意味は明らかであるが、単にヴァチカンと呼ばれる場合は、必ずしも、その意味するところは様ではない。それは、ヴァチカン市国を意味することもあるし、ヴァチカン宮殿を意味することもあるし、法王聖座を意味することもある。したがって単に、ヴァチカンと呼ばれる場合には、その前後の文言をもって、これらのうち、どれを意味するかを判断する以外に方法はない。このような曖昧さを避けるために、国際連合は、1957年に、法王聖座と合意の上で、ヴァチカンという名称を使用しないこととした。したがって、国連関係の諸会議に、法王の官憲が招待される場合は、常に法王聖座代表と呼ばれることとなった。…しかし、本便覧の標題としては、法王聖座とヴァチカン市国の双方を意味するものとして、ヴァチカンという名称を用いた」と記している。

このように、通称としてローマ教皇庁を指して「ヴァチカン」という場合があるが、1996年刊行『新カトリック大事典』では、この名称は、教皇を国家元首と「ヴァチカン市国に限定して使うべきであろう」としている。（新カトリック大事典）

- (2) 20世紀に入ってから長官は、Antonio Giovanni Benedetto Gotti (1902-1916)、Domenico Serafini (1916-1918)、Willem Marinus van Rossum (1918.3.12-1932.8.30)、Pietro Fumasoni-Biondi(1933.3.16-1960.7.12)、Gregorio Pietro Agagianian(1960.7.18-1970.10.19)、Agnelo Rossi(1970.10.20-1984)、Tomko Jozef(1986-2001)、Sepe Crescenzo(2002-)

- (3) 福音宣教省は全世界のカトリック教会の宣教活動を指導・調整する部署である。

その成立については、1400年末頃にはすでに、宣教活動の拡大に伴い、ローマに宣教のセンターを設置

する必要が教皇に提言されていた。大航海時代が始まり、数多くの宣教会が各地に出かけるようになると、枢機卿の指揮監督のもとに全宣教地に対して権限を有する省の設立が求められた。

布教聖省Sacra Congregatio de Propaganda Fideは、1622年6月22日、グレゴリオ15世教皇の使徒憲章「インスクルタビリ・ディヴィナエ (Inscrutabili Divinae)」によって正式に設置され、1862年、ピオ9世の「ロマニ・ポンティフィケス (Romani Pontifices)」で改組され、西欧部門と東方部門に分かれ、東方部門が1917年に独立して東方教会省となった。1967年、パウロ6世は第2ヴァチカン公会議の「宣教活動教令」に則った改組を行い、福音宣教聖省または信仰宣布省Sacra Congragazione per l'Evangellizzazione dei Popoli o «DE PROPAGANDA FIDE»と名づけられた。さらに1988年、ヨハネ・パウロ2世の使徒憲章「パストル・ボヌス (Pastor bonus)」により福音宣教省と改称された。

- (4) Archivio Storico の公文書の分類は、1893年に根本的な変更が行なわれ、1893年から1922年までの文書保管は、le Rubriche とil Protocollo で整理されている。2006年夏までに公開されている文書は1922年までである。N.Metzier, N.Kowalsky "Inventory of the Historical Archives", Roma 1983 参照
- (5) ヴィレム・マリヌス・ヴァン・ロッスム Willem Marinus van Rossum。1918年3月.12日から1932年8月30日まで布教聖省長官の任にあった。オランダ出身のレデムブートル会士。1879年司祭となり、教義学教授。1911年以後枢機卿としてベネディクト15世教皇、ピオ11世教皇の布教に関する協力者として活動した。
- (6) Acta Sanctae Sedis は、非公式な文書として1865年アヴァンチーニによって創刊されたが、1904年正式広報とされた。1908年ピオ10世教皇は、教皇令によってこの広報を使徒座文書Acta Apostolicae Sedisに改名させ、教皇庁の唯一の正式広報とした。教皇の教令、回勅、主な説教のほかに、教皇庁の各省の公文書および教皇による諸任命などが載せられている。『新カトリック大事典』1、参照
- (7) 1885年5月12日付 Lettera all' Imperatore del Giappone Mutsuhito, Acta Sanctae Sede, vol.XVIII, fac.CCIX, p.209 Leo Magnino "Pontificia Nipponica" 2, Roma 1948, p.73-75 1873 (明治6) 年2月24日、太政官布告によって、明治新政府はキリシタン禁制の高札撤去を布告した。
- (8) ピオ9世教皇は、1866年パリ外国宣教会のプティジャンを日本駐在教皇代理 (代牧) に任じていたが、1875年プティジャン司教がローマに赴いて代牧区の分割を申請したことを受け、翌1876年、日本代牧区を二分し、長崎を中心とする日本南緯代牧区と東京を中心とする日本北緯代牧区に分割し、プティジャン司教に南緯代牧を委ね、北緯代牧にオズーフを任命した。1888年にはレオ13世教皇によって、新たに大阪を中心とする日本中緯代牧区が設立された。さらに1891年北緯代牧区から函館代牧区が分かれたが、1891年日本に教階制が実施され、東京・函館・大阪・長崎の代牧区は司教区に昇格、東京を首都大司教座と定め、オズーフを初代東京大司教に任命した。長崎ではクーザン司教が大浦天主堂で長崎司教として着座した。
- (9) オズーフ Pie'rre-Marie Osouf (1829-1906)。フランス・ノルマンディー地方に生まれ、1852年司祭叙階、1856年香港に派遣された。1876年日本司教に任命され、翌年来日した。
- (10) 1903 (明治36) 年教皇レオ13世の薨去に際し、日本国政府破国務聖省宛に、「法皇崩御ニ際シ日本帝国政府ハ深厚ナル弔詞ヲ呈ス」(外務省訳文 高木一雄著『日本・ヴァチカン外交史』1984年聖母の騎士社、p.313) と弔電を送り、教皇庁からは、「レオ13世ノ逝去ニ際シ日本政府ノ名ニオイテ表明サレタ心差ニ対シテ聖省ハ心カラ受ケタ」(外務省訳文) と答礼電が送られてきた。天皇あての親電は上奏されている。(同上p.313) 以後、教皇、また天皇の崩御に際してはこのような弔電、教皇選出の慶事には、「台下ガ法皇ニ選出セラレタルニ際シ朕ハ誠実ナル祝意ヲ致ス」(外務省訳文、同上p.321) と祝電が送られ、ピオ12世教皇からは、「陛下ヨリ寄セラレタル祝電ハ予ノ特ニ欣快トスル所ニシテ深厚ナル謝意ヲ陛下ニ致スト共ニ崇高ニシテ偉大ナル貴国ノ繁昌ヲ祈ル」(外務省訳文、同上、p.322) という礼電が送られたが、ヴァチカンでの教皇戴冠式に日本国政府代表の参列はなかった。
- (11) オコンネルWilliam Henty O'Connell (1814-1897) 米国マサチューセッツ州生れ。1884年司教叙階。1894年ローマの北米神学院の院長となる。1901年メイン州ポートランドの司教となり、日露講和条約調印直後の1905年11月10日、ピオ10世教皇の特使として明治天皇に謁見、教皇の親書を手渡した。高木『日本と教会』1、p.275-6参照

- (12) 司教総代理カデイヤック師は、1920年度年次報告に「今年の主要な出来事は、日本における教皇使節館の設置であった。ベネディクトXV世聖下はこの務めを果たすために、ご自分の右腕であるDiocleaの大司教フマゾニ・ビオンディ閣下を指名された。閣下は、築地の小さい司教座聖堂で3月11日に教会法的に教皇使節に就任し、最も熱い歓迎を受けた」と記した（松村菅和/女子カルメル修道会共訳『パリ外国宣教会年次報告』4、聖母の騎士社1999、p.171）。
- (13) ベネディクト13世の小勅書Breve、Leo Magnino, p.109 Act. Ap. Sedis, an. X11, num. 4, 1920, pag. 101
- (14) 教会法364条に、「教皇使節の主な任務は、使徒座と部分教会との間にある一致の絆を絶えずよりいっそう堅固、かつ効果的なものにすることである。したがって、教皇使節は自己の所管において次の責任を有する。1、部分教会の置かれている状況、並びに教会の生活及び霊的善益に関するすべてのことについて使徒座に報告すること。2、司教の適法な権限行使に介入することなく、行動及び勧告によってそれを援助すること。（以下8まで略）」とある。
- Nunzio (nuntius ラテン語) 教皇大使は、ローマ教皇から恒常的にその代理者としての任務を受け、派遣された地域の部分教会および国に駐在する聖職者（一般には大司教が選ばれる）をいう。教皇大使の第一の任務は、使徒座とその他の部分教会とを結ぶ絆を絶えずより一層堅固にかつ効果的なものにしていくことにある。教皇大使はまた、国際的な公的機関に派遣されて、そこで教皇を代表し、教会がその霊的使命を自由に遂行しうるように留意することも、その使命とする。Nuntiusは外交代表者としては第一級に属する。
- 名義司教とは、教区の統治を託された教区司教に対し、教区司教と部分教会の必要のために任命されて名義の座のみを受け、統治権の行使には参与しない司教である。
- 聖座とは、Sancta Sedes（ラテン語）の訳で、聖座という名称は、厳密に教皇を意味するが、教会法では、聖座には霊的主権のほかには世俗的主権が認められる。1870年に教皇領が消滅し、それに代わり、1929年、イタリア国のベニト・ムッソリーニとピオ11世教皇が結んだラテラノ協定によってヴァチカン市国が成立したが、その間の時期にも聖座は国際法上の主体とみなされ続け、多くの国家が使節派遣立法により外交関係を結び、政教条約を締結したのである。
- (15) 1921（大正10）年7月15日、皇太子裕仁親王一行は、教皇庁とイタリア政府との事情を考慮し、宿舎のクイリナーレ宮殿から直行せず日本大使館から教皇庁に向かった。儀仗兵がならび立つ中、儀礼聖省長官、貴族近衛隊司令官、そして布教聖省所属のフマゾニ・ビオンディ大司教など15名の高官に迎えられ、12名の近衛兵に護られて教皇居室へ向い、教皇書斎でベネディクト15世教皇に謁見した。翌16日ヴァチカン博物館などを見学している。このとき通訳したのは、東宮職御用掛で熱心なカトリック信者の山本信次郎海軍大佐であった。
- (16) 『日本外交文書』大正12年第3冊392 高木、p.49）「ローマ法王庁ニ使節駐節ニ関スル件」に、「四 法王庁ハ大正八年宗務使節トシテ『ビオンディ』僧正ヲ本邦ニ差遣シタルカ帝国政府ハ之ニ対シ相当ノ礼遇ヲ与ヘ勲二等瑞宝章ヲ贈リ更ニ昨夏皇太子殿下ノ同庁訪問ニ際シ勲一等ニ陞叙セル処…」と、閣議での外務大臣内田康哉の説明を記録している。これらに対してのビオンディ大司教の談話が『日本外交文書』大正12年第3冊392に掲載されている。
- (17) 日本政府は、1952年1月22日、平和条約発行に伴い、ヴァチカン市国との国交回復を閣議決定した。4月28日、対日平和条約発効に伴い、駐日ローマ教皇庁使節館が公使館に昇格し、初代駐日公使マキシミアン・ド・フルステンベルク大司教が5月10日、信任状を捧呈した。これに対し、4月28日、駐ヴァチカン臨時代理公使に一等書記官金山正英が任ぜられ、翌1953年1月26日、駐ヴァチカン特命全権公使井上孝治郎が着任した。
- (18) Pontificia Università Urbaniana ANNALES, 2002-2003, Roma 2004, pp.173-177.
- (19) 上智大学中世思想研究所編訳『キリスト教史』10、講談社1982、p.471
- (20) 『年次報告』4、p.194.

訳文注

- (21) 1921年のパリ外国宣教会年次報告には、コンパス司教が次のように書いていると記されている。「我らの仕事の単調さを破った目立った出来事、それは教皇使節による司教区の一部の訪問であった。我らのカトリック信者たちは皆、教皇の代理に会い、その祝福を受けることで大いに喜んでいた。彼らの貧しさにもかかわらず、出きる限り、よく使節を迎えようと何もおろそかにしなかった。使節は果された仕事、勝ち得た成果、我らにその手段があるならば、実現したいと思っている、まだ残された多くのなすべきことを自分で見て、納得することが出来た」(『年次報告』4、p.193)と記されている。
- (22) 1866年パリ外国宣教会プティジャン神父が日本駐在教皇代理(代牧)に任命され、ミリオフト名義司教に挙げられた。1876年、日本代牧区は、南緯代牧区と北緯代牧区に二分され、各20人の司祭が配属された。南緯代牧区はプティジャン司教が自ら代牧となって、長崎の大浦天主堂に司教座を置いた。北緯代牧区にはオズーフ神父が任ぜられ、パリで司教叙階された。1888年には南緯代牧区を分割し、近畿・中国・四国を中部代牧区とし、ミドン司教を教区長とし、司教座を大阪に置いた。さらに1891年、北緯代牧区を二分、函館教区をつくり、ベルリオーズをカリダ名義司教として函館教区長に任じた。それより2ヵ月後、日本の教会に教階制が実施され、各代牧区が司教区(東京・函館・大阪・長崎)に昇格、東京を首都大司教区と定めた。1904年、四国は大阪教区から独立して知牧区となり、ドミニコ会マニラ管区に委ねられた。1912年には新潟知牧区設立、1915年札幌知牧区が設立された。九州全県と琉球が長崎教区であった。
- (23) 1921年パリ外国宣教会年次報告の長崎の箇所で、「長崎の宣教師たちと、日本人司祭たちは、…彼らの仕事の性質上、二つの組に分けることができる。異教徒の町に住んでいる者たちは、ただ一つの目的しか持たない。すなわち信者共同体の核を形成し、あちこちからできるだけ数多くの大人の洗礼を拾い集めて、これを発展させること。旧信者共同体をまかされている人々は、第一の心遣いとして、新しい信者をつくるというより、むしろ、すでにいる信者の霊的必要をみたすということである」と記している。(『年次報告』4、p.194)
- (24) かくれキリシタンの復帰に司祭たちが努力を怠っていたのではない。例えば、1901年の「年次報告」では、「五島の地区では102の成人の再生があった。そこでは殆ど例外なく、離れた旧キリシタン信者の子孫に対する司祭、伝道士の熱意が功を奏した。受洗者たちは羊の小屋に戻った迷える羊であった」と述べている。
- (25) 『『従来信者たちは農事を主とせし関係上、専用漁業権に対しては頗る不利の立場にこれあり候』と北魚目村長宮田氏も言って居られる。実際、ひじき、わかめ、その他海藻類は、近年まで之を対等に採取するを許されなかった。鯛ノ浦では郷民が三日間採取した残りだけが、漸く彼等の手に委ねられるのであった』と、浦川和三郎著『五島キリシタン史』1975年図書刊行会発行、p.221に見ることができる。
- (26) この気骨ある日本人司祭は、長崎教区司祭ヨゼフ大崎八重神父と思われる。大崎師は五島の信徒の生活環境改善に奔走し、「五島のド・ロ神父」とも呼ばれたという。『パリ外国宣教会年次報告』1919年の項に、「五島の北部と中心の堅信のための私の巡回旅行中、私は至るところで信者の信心と子供たちの堅実な教育に関心させられた。故ペリユー師の学び舎で18年間養成された日本人司祭大崎師は、彼に代わり、そのすべての若い同僚たちを指導している…」とある。また、1920年の報告には、「五島諸島のカトリック人口は…日本人司祭大崎師の優れた指導のもとにある」と記され、1921年にも同じようにその指導力が報告されている。
- (27) フランスのサヴォア県サン・ベランに生まれ、1877年パリ外国宣教会入会、1880年司祭叙階後来日。南緯代牧区に派遣され、大阪小神学校校長を務めたあと、1882年から長崎の小神学校でラテン語を教えていた。1911年クーザン司教の帰天後、長崎教区長に任命され、教区の司牧に全力を尽くしたが、長く小神学校での教育に携わってきたコンパス司教は、とくに日本人司祭養成を宣教の第一としてきた。その働きによって長崎教区の日本人司祭養成は進み、長崎は日本で最初の日本人教区長に託された教区となった。コンパス司教の司牧期間に、教区には20以上の教会堂、30以上の巡回教会が建設され、彼の教育を受けた日本人司祭の数は30人以上となった。(『新カトリック大事典』2参照)
- (28) 1860年フランスに生まれる。1928年、信者の司牧とかくれキリシタンへの布教を目的として生月の山田

教会に赴任した。宣教活動に協力する修道会の必要を感じ、「山田愛苦会」を創立し、霊的、物的基礎を据えた。4年後東京の聖母病院付司祭として赴任し、病人や修道女の霊的世話にあたった。道を歩く間も惜しんで読書をしていたという。1938年聖母病院で帰天。（『お告げのマリア修道会史 礎』お告げのマリア修道会1997年発行、p.153参照）

- (29) 『パリ外国宣教会日本年次報告』には、1921年「使節を歓迎するため、日本人司祭が8人集まっていた五島で、ラテン語はぜひ必要な言葉であった。地区ではラテン語を使う機会ほとんどなかったので、彼らは以前のような容易さを失ったとはいえ、なかなかりっぱにやりとげた」と記されている。

- (30) Collegium Urbanum de Propaganda Fide コレジオ・ウルバノは、教皇庁立ウルバノ大学の前身。布教地生れの聖職者を教育する機能を持つ機関の中で、教皇庁は、コレジオ・ウルバノに特別の地位を付与した。福音宣教省に帰属するウルバノ大学には、福音宣教省の管轄下に置かれたすべての地域から学生が集まり、コレジオ・ウルバノに寄宿し、何年かの間ローマの雰囲気親しみながら司祭職に就く準備をしている。布教聖省が置かれたスペイン広場の古い建物からジャンニコの丘に移転し、1931年正式にウルバノ大学が開校した。

1927年ピオXI世教皇によって日本人最初の司教に叙階された早坂久之助司教は、1905年、日本人神学生の最初のプロパガンダ・フィデの奨学生となり、ローマのコレジオ・ウルバノに留学した。福音宣教省は、神学生養成のためのコレジオ・ウルバノのほか、布教地の司祭の研修のためにコレジオ・サン・パウロ、コレジオ、サン・ピエトロを、1977年からは布教地の修道女のためのパウロVI世寮を設置している。これらで学ぶ学生はすべて福音宣教省管轄の信仰弘布会の奨学金を支給されている。筆者はパウロVI世寮の日本人第1号として勉学の機会を得た。

- (31) 山川清 1885年長崎の本原に生まれる。長崎教区のローマ留学生第1号としてコレジオ・ウルバノに学び、日本人最初の神学博士となる。1912年3月、ローマで司祭叙階。帰国後、長崎教区の水之浦、奈留島、平戸、出津、各教会司牧を経て神学校校長、晩年は井持浦教会主任。1927年から1932年まで平戸教会で司牧した間の1929年、平戸・聖ヨゼフ修道院を創立し、「聖ヨゼフ院規律」を作成し、典礼や教会奉仕のあり方に新しい方法を示した。1930年に平戸教会の建築を始め、翌年完成した。1932年から1940年出津教会主任のとき、上小田、下小田の修道院を合併し、「共愛姉妹会」とし、霊的刷新を図った。1947年11月6日大浦で帰天。

- (32) コンパス司教は、「使節はラテン語の勉学の程度を評価するため、我らの神学生を一度ならず訪問した」と記している（『年次報告』4、1921年報告、p.193）。1918年の年次報告によると、「生徒たちは他の学校の生徒のように徽章をつけた制帽をかぶり、袴をつけて散歩に出る」と記し、神学生の生活の様子をうかがわせている。P.144

- (33) 開国に備えて日本の布教を託されたパリ外国宣教会は、非キリスト教国の国民にキリストの福音を伝えることを目的とし、現地人聖職者の養成が規則の重要条項となっている。早くも1865年12月8日には、大浦の司教館2階屋根裏に神学生のための隠し部屋ができた。これは復活教会最初の神学生養成所でその日の祝日にちなんで「無原罪の御やどりの間」と名づけられた。1867年に「浦上四番崩れ」が勃発すると、プティジャン司教は7月28日10名の神学生を香港を経てペナン神学校に入学させたが、4名が現地で死亡した。1869年には13名の神学生が上海に避難、香港に渡った。この組も3名が香港で病死した。病気で弱った人たちは相次いで横浜や長崎に帰り、1987年12月、ペナンにいた神学生たちも横浜に帰った。その後神学生たちは東京に移って勉学を続けた。1875年プティジャン司教は長崎に神学校を建て、東京にいた長崎出身の神学生が帰ってきた。「神学校に40名の学生がいます。…彼らの大部分は“主のため”旅に行った人たちであります」と司教はパリの宣教会本部に知らせた。1882（明治15）年12月31日待望の叙階式が挙行政され、3名の日本人司祭が誕生した。（カトリック長崎大司教区編『旅する教会』1977年発行、pp.158～172参照）

教区立神学校の開設は、遠くトリエント公会議で決議されたことであった。その結果、1598年長崎にはセルケイラ司教によって教区神学校が開校され、1614年の追放令までに7名の教区司祭が誕生していた。ベネディクト15世は1919年、回勅「マクシムム・イルドMaximum illud」をもって、司教職をも含めて完全な権限を有する現地人聖職者の創出を推進する』よう命じた。しかし、その成果が不十分であった

とし、教皇は布教聖省に対して、管区にまたがる神学校の設置と然るべき運営とに注意を払うよう訓令を出している。

布教聖省は、1926年のピオ11世の回勅「レールム・エクレジアエ」を受けて、管区神学校が順調な歩み続けるよう、それらの運営に関して極めて直接的な権限を留保した。つまり、布教地生れの聖職者を教育するために、教皇庁は布教聖省の管轄下にあるすべての地域から集まる学生を教皇庁立コレジオ・ウルバノ（現ウルバノ大学）で学ばせ、ローマの雰囲気の中で司祭職への準備をさせた。布教地に司祭は数的にも質的にも向上した。

- (34) この日本人司祭は、1897（明治30）年から1944（昭和19）年まで神学校教授であった松川涼師と1910（明治43）年から1940（昭和15）年まで教授であった浦川和三郎師である。1919年のパリ外国宣教会年次報告に、「彼（浦川師）は特に神学校で日本文学の授業に携わることになるだろう」（『年次報告』4、p.157）と記され、また、1922年の報告には、「浦川師は神学校においての国文学の教師でもあるが、多くの小論文、信心書、教理等を日本の修道会、伝道士、信徒の為に発刊した。彼の著書は単純で理解しやすく、至るところで良く読まれている。ある著書はすでに再版されているくらいである」（p.220）と述べられている。1917年2-11月早坂司教の辞任により臨時長崎教区長を務め、1941年仙台教区長に任命された。1954年教区長を辞任、1955年11月24日没した。翻訳は100冊以上におよび、生涯を通じた文筆による宣教活動が顕著な業績であるが、とくに浦上四番崩れの体験者から聞き取りした『旅の話』、それに続く『切支丹の復活』、「浦上切支丹史」、『五島切支丹史』、『朝鮮殉教史』、『東北キリシタン史』など、キリシタン史研究における業績は大きい。蔵書は遺言により長崎純心女子短期大学に譲られ、現在長崎純心大学キリシタン文庫の重要な蔵書となっている。
- (35) 19世紀後半、カトリック教会の布教に活力を与えたのは、布教活動にたずさわる人員が驚くほど増加したことにある。それまでは、布教のみを目的とする修道会は17世紀に設立されたパリ外国宣教会が唯一であったが、リーベルマンによる聖霊修道会の創立以降、日本で現在も活動しているミラノ宣教会、聖心宣教会、淳心会、神言会、メリノール宣教会などはこの時期に創立された。
- (36) 『マリア会日本管区 100年のあゆみ』歴史編には、「長崎の学校は、最初から東京・暁星と対をなすものとして、『海星』と名づけられた。『海の星』は、聖母マリアのことで『大海原に輝く星になれ』『学園で学ぶ学生たちが、海の星となって人々を導くように』そうした願いが込められて『海星』と命名された」と記す。（マリア会日本管区編『マリア会日本管区 100年の歩み』歴史編、1999年、p.39）
- (37) パリ外国宣教会年次報告1921年には、「マリア会の修道士たちの中学は、ますます隆盛である。これらの優れた協力者たちは、実によく信頼を勝ち得たので、入学志望者は押し寄せてきて、入学を許された者たちは幸せだと思っている。これは教育の威信による、キリスト者の名の宣伝である。年が経つにつれて成果は疑いなく豊かになろう」と述べている。（p.195）
- (38) 「1892年、海星学校を始めた第1目的は志願者募集だったが、実際には1898年までマリア会志願院は存在しなかった。…1903年まで、日本人の学生修道者や修練者は、暁星修道院や海星修道院に寄寓し、明確な養成制度も確立していなかった。…1907年、浦上教会から15分ほど歩いたところに土地を見つけた。…1910年浦上使徒学校は『聖マリア学院』の名の下にクザン司教により祝別・竣工された」（『100年の歩み』p.39）。
- 「使徒学校の目的は『若い日本人の教育、例えば、師範学校入学までの準備、および、修道者として適当と認められる者に修練院に入るまでの指導を授ける』ことだった（p.51）
- 使徒学校は城山の丘にあった。「1928年までに『聖マリア学院』で学んだ者は282人、その内93人がマリア会で初誓願を宣立し、66人が終生誓願を宣立した。その他、教区司祭になった者は6人、トラピスト修道院に入った者は2人だった。『聖マリア学院』は1932年（昭和7）3月まで志願院と修練院としてその役割を果たした」（p.55）。
- (39) 19世紀後半の宣教活動を活発にしたもう一つの刷新的要因は、修道女が布教のすべての分野に登場したことである。19世紀末には、「44,000人のヨーロッパ人修道女が、すべてを捨て、すべてを犠牲にしてキリストの使徒たちの労苦を分かち持ち、われわれの誇るべき学校や病院や孤児院や無料施療院などを運営した」とルヴェ神父は指摘している。この時期以降、プロテスタントの布教においても婦人たちが

重要な役割を果たした。(『キリスト教史』10、pp.363-364参照)

- (40) マリアの宣教者フランシスコ会はハンセン病患者の世話のために1898年来日、熊本で「待労院」を開設、1900年には欧米からの寄附を受けて熊本市外の島崎に病院を新築移転し、土地の字名「琵琶崎」から「琵琶崎待労病院」と後に名づけられた。1898年末頃より孤児院も始まっていた。それは、ハンセン病患者が集まる本妙寺の境内、行き倒れになり、瀕死の状態の母親とその子どもを救ったのに始まる。1979年まで続いた養護施設「琵琶崎聖母愛児園」のはじまりであった。(田代菊雄著『日本カトリック社会事業史研究』法律文化社1989年、p.67-68参照)
- (41) Jean-Marie Corre (1850.6.28-1911.2.9) フランス・ブルターニュ地方出身。1875年パリ外国宣教会入会、1876年日本に派遣され、天草、今村の旧信者への布教、神学校教授をつとめる。1889年から特に熊本を中心とした布教活動に入り、熊本、八代、人吉に教会と病院、診療所を創立、琵琶崎にハンセン病院設立、それに伴う患者への布教の手段として、伝道婦の養成と活動にも力を入れた。特に熊本を中心に日本人司祭と一緒に宣教司牧にあたりながら、神学論文も残した。1906年社会福祉の功績に対し、日本政府より勲章を授与された。(『新カトリック大事典』Ⅱ、参照)
- (42) シャルトルの聖パウロ修道女会は、北緯教区のオズーフ司教の要請を受けて来日。1878年5月28日函館上陸、マラン神父が用意した木造2階建ての洋館で、直ぐに8人の孤児を預かって育児事業を始めた。東京、新潟、仙台、盛岡について、1900年コール神父の招きに応え、熊本県八代に修道院を設けた。施療事業、「ナザレ園」と名づけられた孤児院、「博愛医院」の開設、1908年「私立八代技芸学校」を設立、教育事業も始めた。(田代菊雄著前掲書、p.63-66参照)
- (43) 1921年の年次報告に、「八代の住民たちは、特に公立学校の教師たちによって刺激されてカトリック教に反対しているが、シャルトル聖パウロ修道会の修道女たちの学校に対しては態度を変えた。今、彼らはこの学校を大いに尊重し、320人の生徒の中、町が提供している生徒が大勢いる」と記している。(同 p.196)
- (44) ショファイユの幼きイエズス会の修道女たちは、1873年来日のサン・モール会に続く第2陣として、1877年中ごろ、プティジャン司教に引率されて来日した。神戸に住み、直ぐに、ビリオン神父から託された孤児たちの世話を始めた。「神戸女子教育院」の前身であり、神戸における児童保護施設の最初のものであった。2年後の大阪でも孤児の世話を始めた。長崎での事業は1880年修道院設立から始まり、翌年現在の「マリア園」の前身である「長崎センタンファンズ」と授産所を開設。1886年には岡山女学校開設、1889年、現在の養護施設「京都聖嬰会」の前身「京都天主教女子教育院」を始めた。1889年熊本に赴任したコール神父の求めで、会員を熊本に派遣、今日の「天使園」の前身「センタンファンズ」の家が建てられた。また、隣接地に診療所を開設、これが「イエズスの聖心病院」となる。1896年からコール神父がハンセン病患者の救済に乗り出すと、2人の会員がその仕事に従事し、マリアの宣教者フランシスコ修道女会が受け継ぐまで続けた。(同 p.56-62参照)
- (45) 1875年、長崎港外、蔭之尾島に発生した天然痘の救済活動で、ド・ロ神父の片腕となった浦上の「旅」の経験者岩永マキたちが、天然痘で両親を失った幼女を連れて来て始まった養育事業「浦上養育院」は近代児童福祉事業の最初のものとなったが、集まってくる孤児たちを収容した「子部屋」で養育にあったマキたちの共同体は、ド・ロ神父によって修道生活に準じたものとなった。この共同体「十字架」(女部屋)のあり方が、五島、外海に広がり、農業、養蚕、製糸工場、製粉場などの自らの労働で捨子、貧児を養育した。また、小教区の手伝いのための共同体も創立された。
F.マルナスは、その著『日本キリスト教復活史』の1880年ころの長崎に関する記述のなかで、「本原では、相当の数の敬虔な女が、日本の女の普通の着物をきて、本当の修道女のような団体を作って生活していた。彼女らはいくらかの畑を耕し、蚕を飼い、織機を扱い、布を染め、その他種々の仕事をしていて。これで彼女らは富むことはなかったが、質素な生活をするにはほぼ十分だった。彼女らは病人の看護をし、谷の子供に公教要理を教え、伝染病に身をさらすような場合でも、いつも喜んで行くのだった。彼女らは、もはや自分たちの用がなくなると、控え目な態度で会に戻って、鋤か梭を手にしていて」と記している。(久野桂一郎訳 F.マルナス『日本キリスト教復活史』1985年みすず書房、p.522)
- (46) Albert Breton (1882.7.16-1954.8.12) 1901年パリ外国宣教会入会、1905年司祭叙階後来日し、東北地方

で布教に従事した。1910年病を得てイギリスで療養。1912-21年、アメリカ西海岸の日本人移民の福祉と養育のために働いた。再来日後、1925年日本人修道女会「訪問童貞会」を設立した。1931年福岡司教区第2代司教に任命された。七里ガ浜の聖テレジア・サナトリウム、横須賀の聖ヨゼフ病院の創始者。（『日本キリスト教歴史大事典』参照）

- (47) マリア会はコール神父から熊本に学校を開設することを要請された。熊本に派遣された3人のマリア会会員は、「先ず夜間学校を開き、ランバック修道士が19人の生徒に英語を教え、アンリ神父が4人にフランス語を教えた。私塾の名前を『智山』と名づけた…1908年福音ルーテル派の『九州学院』が熊本に開校されたので、『智山』に来るはずの生徒がそちらに流れてしまった。同時に使徒学校が浦上に開校されることになり、会員の力を結集させるため、熊本を去らざるを得なくなった」（『100年の歩み』p.56-57）。
- (48) 福岡司教区は1927年7月16日付ピオXI世の小勅書をもって設立され、初代司教にティリーが任命された。Leo Magnino, "Pontificia Nipponica" 2, Roma 1948, p.116-118
この年、ピオXI世教皇は、大勅書Bulla "Dilecto Filio Januario"をもって函館教区司祭ヤヌワリオ早坂久之助を長崎司教区の司教に任命した。Idid, p.118-119. 日本人初の司教、長崎教区長の誕生であった。これは、現地人司教および現地人司祭に司牧される現地人の教会、さらには現地人教区の創設を会の使命としているパリ外国宣教会の日本における60年の活動の実りであった。宮崎・大分2県は1929年福岡教区から分離、布教区となり、前年来日して布教の体制を整えつつあったサレジオ会に委ねられた。Idid, p.122-124
- (49) 鹿児島県も1927年3月18日付小勅書をもって長崎教区から分離、鹿児島知牧区Prefettura Apostolicaが設立され、カナダ管区フランシスコ会に委ねられた。Lao Magnino, p.115-116

参考文献

- Leo Magnino "Pontificia Nipponica" 2, Roma 1948
Pontificia Università Urbaniana ANNALES, 2002-2003, Roma 2004
N.Metzier, N.Kowalsky "Inventory of the Historical Archives", Roma 1983
日本カトリック司教協議会行政法制委員会訳『カトリック新教会法典』有斐閣1992年
松村菅和/女子カルメル修道会共訳『パリ外国宣教会年次報告』4、聖母の騎士社1999年
高木一雄著『日本・ヴァチカン外交史』聖母の騎士社1984年
久野桂一郎訳 F.マルナス『日本キリスト教復活史』みすず書房1985年
カトリック長崎大司教区編『旅する教会』1977年
『お告げのマリア修道会史 礎』お告げのマリア修道会1997年
マリア会日本管区編『マリア会日本管区 100年の歩み』歴史編、1999年
「ヴァチカン便覧」外務省欧亜局1965年
上智大学中世思想研究所編訳『キリスト教史』10、講談社1982
浦川和三郎著『五島キリシタン史』図書刊行会1975年
田代菊雄著『日本カトリック社会事業史研究』法律文化社1989年